

令和元年12月21日

報告者 角田正衛

—原六郎「貴人ハ吾人之恩人」(新島襄)—

激動の幕末・維新を生き、明治の実業界で活躍

1.生野の変、郷土から士族へ、そして海外留学へ

(1)出自

原六郎(1842年～1933年)は、天保13年11月9日に鎌倉時代より続く但馬国佐中村(現兵庫県朝来市)の大地主・進藤家の第22代目当主・進藤丈右衛門長廣の六男四女の末っ子として生まれる。

名を長政、幼名を俊三郎と称す。後に「原六郎」と改名(逃亡のための変名)。

11歳の頃、儒学者であり但馬聖人と称えられていた学僧の池田草庵の私塾・青谿書院^{せいけいしよくいん}に入門し、北垣国道(後の京都府知事)らと共に学ぶ。池田草庵門下には、他に浜尾新(後に東京帝大総長・文相を歴任、元東宮侍従浜尾実の祖父)、河本重次郎(日本近代眼科の父)等がいる。

尊皇攘夷派の活動に触発され原も尊皇攘夷論を唱えるが、師・池田草庵は学問に政治活動は邪道と考える人で、師と意見が合わず、北垣らと共に青谿書院を脱退し、京都で平野国臣(福岡藩士・討幕派)等と親交を結ぶ。

* 六郎の同時代人

天保12年生まれ 伊藤博文(初代総理大臣)、福地源一郎(ジャーナリスト)

天保13年生まれ 大山巖(陸軍大将)伊藤忠兵衛(伊藤忠商事創業者)沖田総司(新選組隊士)

天保14年生まれ 新島襄、西郷従道(海軍大将)

(2)生野の変(生野の義挙)

文久3(1863)年8月の孝明天皇大和行幸に際して、土佐脱藩浪士吉村寅太郎が組織した尊皇攘夷派浪士の一団(天誅組)が大和で挙兵(天誅組の変)。これに呼応して同年10月に生野で起きた尊王攘夷派の挙兵。八月十八日の政変により状況が一変したことから双方の企ては何れも失敗に終わる。

生野の変において原は武器周旋方として参加。

京・四条木屋町の具足屋・大高又次郎のところで武器調達をするため、京の旅籠・花屋宿泊時に池内蔵太(後に海援隊士)に会い、天誅組大和破陣(制圧)を聞かされ、北垣らと共に一旦生野挙兵中止論を説く。しかし、南八郎(旧名・河上弥市。高杉晋作の親友で奇兵隊第2代総監)らの強硬論が勝り、挙兵は決行された。京で武器を調達していたが搬送の途中で生野破陣を知り、佐中経由で美作路から因州鳥取へ逃れた。

同年、情勢を探るべく、京、江戸へ入り、鳥取藩士の松田正人や河田左久馬(後の山国隊隊長、初代鳥取県権令)、千葉重太郎(桶町千葉道場、北辰一刀流)らの庇護を受ける。当時は、生野の変に参加した者への探索が厳しく、探索から逃れるため、「原六郎」という名に改める(変名を使う)。進藤家が藤原氏の流れを汲む家柄であることから藤原から原の一字を取ったと言われている。六郎は六男から？

なお、桶町千葉道場に潜伏していた頃に坂本龍馬と友人になる。

(3) 坂本龍馬との交流

元治元(1864)年正月に江戸に北垣らと潜入し、4~5ヶ月間、桶町千葉道場に潜伏。

千葉道場は千葉周作の弟の千葉定吉が創設した道場で、当時は定吉の息子千葉重太郎が道場主になっていた。重太郎は脱藩者や浪人達を匿っていたことから幕府や藩からは要注意人物と見られていた。

かつて千葉道場で稽古をし、塾頭まで務めた坂本が出入りしてことで知り合いとなった。

因みに、龍馬の婚約者と言われた佐那は重太郎の妹である。

強兵ではなく国力増進(強国)には商工業の発達が重要と説く、武士からぬ発想を持った龍馬から感化を受けたことが後に実業界に入る動機となったと言われている。

千葉道場を退去した後は赤坂檜町の長州屋敷に移った。

* 幕末江戸での三大道場と言われていた「士学館:鏡新明智流(桃井直由が開設)」、「玄武館:北辰一刀流(千葉周作が開設)」、「練兵館:神道無念流(斎藤弥九郎が開設)」には全国各地から剣術修行の若者が集まり、道場は単に剣の腕を磨く場としてだけではなく、貴重な情報交換の場であったと思われる。

(4) 戊辰戦争への参戦

鳥取藩士河田佐久馬が隊長を務める丹波桑田郡山国郷の農兵部隊「山国隊」の司令として鳥取藩に仕官した千葉重太郎等と戊辰戦争に参戦。箱館の五稜郭では新選組の土方や榎本武揚らと戦った。

* 京都の三大祭りの一つとなっている時代祭りの先頭の維新勤王隊列の祖型はこの山国隊である。

(5) 米国留学へそして渡英

明治4(1871)年5月、明治政府から30万石以上の大藩から留学生2名選拔せよとの達しが出され、原は鳥取藩からの指名を受け米国に留学することになった。

しかしながら留学途中の明治4年7月の廃藩置県により、政府、藩からの官費は打ち切られ、殆どの留学生は帰国の途に就いたが、原は海外視察員並びに藩の大隊長の軍職を辞し、米国にそのまま残留。所持金を銀行に預け運用することで学費を捻出すると共に生活費はアルバイトで稼ぎながら英語学校で英語力を高め、その上でエール大学に通い経済学を学んだ。

その後、渡英しロンドンにあるキングスカレッジでレオン・レーヴィ博士に就いて経済学特に金融論、銀行論を学んだ。

そもそも原が経済学を修めたいと思った動機には幕末期の坂本龍馬との出会いや明治2年11月の師と仰いだ大村益次郎の暗殺が影響していると言われている。

士分を得たとはいえ、長州・薩摩の出身ではなく、後ろ盾を失った今のままでは軍事に従事しても将来の展望は開けないと感じ、商工業の発展に寄与することが自分の進むべき道との強い思いを持つに至ったのではないだろうか。

2. 新島襄との出会い・同志社への支援

(1) 新島襄との出会い

原が米国留学中ボストンで当時米国アンドバー滞在中の新島襄と出会う。

明治4年9月4日、亡くなった弟雙六と備中松山藩士川田剛が開いた川田塾で一緒だった鳥取藩の池田

のります

徳潤がボストンに来ていることを知り、弟雙六の死因等を尋ねるため宿舎に出向いた折に池田と同じく鳥取藩からの留学生であった原六郎と初めて顔を合わせた。このことは、新島の父民治宛ての手紙の中に記されている。9月4日から9月6日までの短期間ではあったが、新島は原と起居を共にしたのである。異国の地で二人が具体的にどんな会話を交わしたのかは記録として残っておらず不明であるが、志を持った同い年の若者同士、何か通じ合うものをお互い感じ合った可能性は高い。原はこの時には既に廃藩置県のことは知っており、今後の身の振り方を考えていた時期かもしれない。

時は流れて、原は当時京都府知事であり古くからの友である北垣国道の仲介により、新島の理解者で支援者である奈良の山林王、土倉庄三郎の長女富子(同志社女学校卒)と結婚することとなる。

原と富子の結婚式は明治21(1888)年2月25日、北垣国道が媒酌人となり、新島の司式により京都円山・中村楼(洋式会場)で行われた。

原と北垣そして土倉、新島を巡る四人の関係がこの結婚をプロモートし、その後の原と新島の関係、原の人生そのものに少なからず影響を与えることとなった。

(2)同志社への支援

原は明治21年4月22日、井上馨邸での有志会合に井上からの通知を受けて出席し、新島の大学設立に向けた募金演説を聞くことになる。ただし、ここでの新島の演説の内容で気になることがある。

原は日記に当日の新島の演説内容を3点に纏めているので以下紹介すると、

1. カトリックの勢力の伸長を防ぎプロテスタントの勢力を増強すること。
2. 人物を養成すること。
3. わが党人を増加させること。

となっている。

同志社大学を設立する目的の第一に、「同志社大学設立の旨意書」には全く触れられていないカトリックの勢力の伸長を防ぎ、プロテスタントの勢力を増強することを挙げている。

このことをどう理解すればよいのであろうか。新島の真意は未だ解明されていない？

4月22日に続き、新島は7月19日に井上の案内で大隈重信外相の官邸を訪ね、募金の要請をしているが、その席にも原は出席している。その席には渋沢栄一や岩崎弥之助も同席していた。

新島は大学昇格へ向けた資金調達のために東奔西走した無理が祟って既に体調を崩しており、結果的にはこうした活動が命を縮めることになるが、東京では井上の仲立ちにより原や渋沢、大隈を始めとする政財界の有力者からの賛同を得て31,000円の寄付を集めることが出来た。

原は渋沢と並んで個人としては最高額である6,000円という多額の寄付し、新島襄をして「貴人ハ吾人之恩人」と言わしめたと伝えられている。

また、原は、新島の死期が迫る明治23年1月22日、前夜の徳富蘇峰からの新島危篤の電報を受け電車で大磯の百足屋旅館に駆けつけ、臨終を前にして新島、徳富に面会し、1月21日付けの新島から原宛ての書簡を蘇峰から渡された。そこには以下のように書かれていた。

「謹て告別申上候、是迄同志社大学の為には不^{かんばい}一方御高配被成下候儀奉感佩候、小生没後も行^{かんばい}く末長く御心に懸け被成下度、乍此上懇請申上候」

原のこの見舞いの一件は何故か知られていないが、原は新島の臨終直前に立ち会った数少ない人物であり、二人の親交の深さを感じさせる一幕と言えよう。

※臨終に際して新島は、八重、徳富蘇峰、小崎弘道へ遺命として井上馨への書簡を依頼したが、その内容は、原宛の書簡と日付も内容も全く同じであった。恐らく多額の寄付をしてくれたメンバーには同じ書簡が送られているのではないだろうか。

原は新島の遺言を心に留め、新島亡き後も同志社に対して援助を続けた。

その象徴が現在の寒梅館の近くにあった原学寮と呼ばれた学生の寄宿舍で、原の寄付(400 円)によって建設され、昭和 30 年代迄は文化学科研究室、通称「北寮」として使用されていた。

当時の原学寮の学生達は原に対して敬慕の念を抱いており、明治 45 年 12 月、原が大病を患い帝大病院に入院していることを伝え聞いた寮生達は真心を込めた見舞い状を原学寮総代名で送っている。

「同志社人物誌 原六郎」(同志社時報第 62 号 1977 年 11 月)の中で筆者の仲村研氏も言われているように同志社人はもっと原のことを知り、彼の恩を忘れてはならないと思う。

3. 実業家・原六郎

(1)銀行の設立と横浜正金銀行頭取

英国からの帰国後、鳥取藩の有志らと第百銀行を設立し、頭取に就任。ときに原六郎 42 歳。

その後、大蔵卿・松方正義の要請で危機に瀕していた横浜正金銀行(後の東京銀行、現三菱 UFJ 銀行)の第 4 代頭取に就任し、松方の意を受け大改革を断行。7 年間に及んだ経営の立て直しにより、中興の祖と呼ばれた。その手腕は高く評価され、経済界に頭角を現し、渋沢栄一、安田善次郎、大倉喜八郎、古河市兵衛と共に「日本財界の5人男」と称された。

なお、松方がその後大蔵大臣となった明治 33 年頃、後に第 13 代日本銀行総裁となる高崎出身の同志社普通科卒業生の深井英五が松方の秘書を務めていた。

(2)原六郎関わった主な企業

①銀行:第百国立銀行、日本興業銀行、台湾銀行、勸業銀行

②鉄道:東武鉄道、総武鉄道、九州鉄道、北海道鉄道

③その他:東京電燈(後の東京電力)、帝国ホテル、猪苗代水力発電、富士製紙、台湾製糖

渋沢栄一が創立委員長を務めた理化学研究所の創設にあたっては、三井・三菱の両財閥が夫々 50 万円を寄付する中で、個人として 30 万円(現在の約 30 億円程度に相当)を寄付した。

4. 素顔の六郎と所縁の人々

(1)家庭人六郎とキリスト者としての六郎

①家庭人六郎

明治 38(1905)年刊行の書物「家庭の模範:名流百家」のインタビュー記事において、妻の富子は、六郎の性格や日常での生活ぶりを次のように語っている。

『出張先からは毎日のように電報や手紙で便りを致し、暇があれば和歌などの贈答を致しております。以前は可なり遊んだこともあったのですが、私が参ってから一度も他へ泊ったことは御座いませず、出先で不意に人様と会食する都合の時は必ず電話で宅へ其の由を申し越すという風で、家内に不愉快な分子は御座いません。芝居も極好きでしたが、私が大嫌いで子供に見せては為にならぬと申しますので、全然参らなくなりました。矢張り何方かに染まるものと見えましてー(中略)

主人は一家の細かい事や子供の教育には少しも構いませぬ。畢竟安心して私に任せて居るからでも御座いましょう。祝儀不祝儀の贈り物なども、一切私一人で取り計らいますので、随分事が多いので御座います。』

六郎は明治 35 年 1 月から三輪義方について和歌を学び始めたが、5 月 12 日に三輪が急逝したため、爾後加藤義清について指導を受けた。同年 8 月の伊香保・千明別荘に避暑に赴いた折には伊香保百首を試みて多くの詠草を残した。

なお、原と同時期に米国・ハーバード大学ロースクールに留学していた金子堅太郎(大日本帝国憲法の起草に参画、日本大学の初代校長)によれば酒は好きだったようである。

②キリスト者六郎

六郎が初めてキリスト教に関心を持ったのは明治の初め、米国留学の時である。当時下宿していた家の妻が敬虔な清教徒で、機会あるごとに東洋の一留学生である六郎にキリスト教の精神を鼓吹し、信仰の種子を彼のこころの中に蒔いてくれた。

その後、同志社女学校において新島襄からキリスト教的精神主義の薫陶を受けた富子との結婚によって若き日に胸中に植え付けられてあった信仰の種子が富子の愛によって次第に培われた。

晩年、閑暇の境遇に入ってからでは東京大手町の教会で内村鑑三の説教に熱心に聞き入る六郎の姿があった。そうして大正 11 年 1 月 3 日、熱海の別荘で木村清松から洗礼を受けた。

木村清松は新潟県五泉市出身で、1891 年 1 月 11 日の朝、吹雪の中を新島の弟子でもある堀貞一より日本基督教会新潟第一基督教会で洗礼を受けた人である。彼は以後、エバンジェリスト(伝道者)として一世を風靡したが、終生堀を恩師と仰ぎ、堀の遺訓を語り続けた。

(2)家族・親族

①妻富子

原は遠縁にあたる橋本安佐と結婚し一女(秀子)をもうけたが事情があつて明治 18 年に離別していた。その後、主治医の高木兼寛(後の海軍軍医総監)や蔵相の松方正義等が再三原の許に縁談を持ち込んだが原は拒んでいた。

明治 20 年 2 月 21 日、神戸出張の折、久し振りに竹馬の友である北垣国道を京都に訪ねると、予ねて原の再婚に気を揉んでいた北垣は大和の名家土倉庄三郎の長女富子の話をした。

その夜、北垣に勧められるままに北垣邸での晩餐会に出席するとそこには同志社女学校の生徒数名に交じって富子の姿もあった。

原も富子のことを気に入ったらしく、この縁談話はトントン拍子に進み、翌月3月3日、大阪（銀水楼）で富子の父、土倉庄三郎と面会した。北垣もその席に同伴した。

土倉は父親として、原は横浜正金銀行の頭取でもあり娘の相手としては申し分ないが、自分とさして年齢差のない中年のそれも離婚歴のある男に娘を嫁がせることには葛藤もあったであろうと推測する。当時富子は同志社女学校の生徒であったことから卒業まで待つて欲しいとの土倉の願いを受け入れ、結婚は卒業後となり、明治21年2月25日に京都・円山の中村楼で媒酌人北垣国道、新島襄の司式で純洋式での結婚式が華々しく挙行された。

富子との間には子どもが4人。何れも女の子であった。

②長女多喜子と夫の邦造

長女多喜子の夫となったのは田中邦造で、邦造は大阪府三島郡阿武野村（現在の高槻市）の出身。

京都百万遍の知恩寺に下宿し、第三高等学校を経て京都帝大法科大学（現在の京都大学経済学部）に進み、首席で卒業。その後、満鉄に入社。満鉄勤務時代に原に見込まれ多喜子と結婚。養嗣子となり、原の事業を継ぐことになった。

第百銀行頭取、東京貯蔵銀行取締役を経て、1924（大正13）年愛国生命社長に就任。また、東武鉄道など多くの企業の取締役を兼ねた。

太平洋戦争中は帝都高速度交通営団（営団地下鉄）総裁を務め、戦後は、電源開発初代総裁、日本航空会長、東京ガス会長、日銀政策委員などを歴任。

邦造は先代同様キリスト教信徒となり、晩年は日本基督教団芝教会長老を務めた。1958（昭和33）年3月31日、前年亡くなった義母富子の後を追うように永眠した。

③その他

富子の兄である土倉家の惣領の鶴松の娘である土倉麻は京都府立第一高女（現京都府立鴨沂高校）在学中に昭和7（1932）年に開催されたロサンゼルスオリンピックの陸上に出場、100メートルは予選落ちしたものの、400メートルリレー（第三走者）では見事5位に入賞、同じく走り幅跳びに出場（6位入賞）した京都大出身の田島直人とその後結婚、田島は4年後のベルリン大会で専門外の三段跳びで世界新記録を出し金メダルに輝いた。

【余禄】麻の娘の和子（小池）は東京オリンピックでミス・メダル（和服の表彰補助員）として活躍。マラソンの表彰式ではメダルを盆に載せて運んだ。当時父親の田島はナショナルチームのヘッドコーチを務めていたが日本選手の不振の責任を厳しく追及されていた。そうした中でのマラソン円谷の銅メダル獲得、国立競技場にはためく日章旗に父娘の感慨も一入だったと思われる。

（3）その他

①北垣国道（1836年9月17日—1916年1月16日）

池田草庵の青谿書院以来の友で戊辰戦争を共に戦った仲間。富子との結婚に際しての媒酌人。

北垣は維新後明治政府の官吏となり、高知県令、徳島県令を経て京都府知事に就任。東京奠都により活力を失いつつあった京都を再生すべく琵琶湖疎水を建設するなど勸業政策を推進した。

その後は北海道庁長官、貴族院議員、枢密院顧問を歴任。

一刀正傳無刀流(山岡流)の剣客であり、京都府知事時代は前任の槇村が禁止していた剣術を奨励し、大道場を御所近くに建設。明治 28 年 4 月に大日本武徳会が設立されると役員も務め、剣術振興に一肌脱いだ。三女(養女)のとく(亡池田友吉長女)は同志社第 6 代社長の下村孝太郎に嫁ぐ。

②斎藤隆夫(1870 年 9 月 13 日—1949 年 10 月 7 日)

原と同郷の但馬・出石出身で徳島県知事をしていた桜井勉(日本の天気予報の創始者)から彼の書生をしていた同じく出石出身の斎藤隆夫を紹介され、桜井退官後は原が斎藤の学資等の支援を行った。斎藤は苦学し、東京専門学校(現早稲田大学)を経て弁護士となり、エール大学法科大学院で公法、政治学を学び帰国後、1912 年に衆議院議員となった(当選 13 回)。

反ファシズム書籍の出版と共に卓越した弁舌・演説力を武器に度々帝国議会で演説を行い、満州事変後の軍部の政治介入、軍部に阿る政治家を徹底批判する等、立憲政治家として軍部に抵抗した。

なお、原の養嗣子の邦造も原の遺志を継いで斎藤への支援を続けた。

5. 原六郎コレクション(原美術館)

(1)原の古美術品の蒐集

原は明治 20～30 代の頃、仕事の都合で近畿、九州地方へ出張する機会が多くなった。その折に時間が空いた時には京都や奈良を訪ね、古美術を鑑賞した。そして気に入った物があれば金銭を厭わず買い求めた。対象は書画骨董の他に考古学上の参考品や古建築にまで幅広く及んだ。

明治 25 年 5 月近江(滋賀県)園城寺から買い取った日光院の建物は蒐集品の中で最も素晴らしいと言われている。この建物は現在東京・護国寺境内に移築され、月光殿として国の重要文化財に指定されている。

当時、有名な寺社でも経済的に困窮した中には、心無い管理者のために古来の宝を二束三文で叩き売りしている所もあり、東洋美術に関心を持ち始めた外国人が豊富な資金力にものを言わせて買い占めた結果、多くの美術品が海外流出している状況であった。

原の古美術蒐集はこうした外人の横暴に対する日本人としての義気に基づいた行動であったと考えられる。なお、原の蒐集品には偽物が少なかったと言われており、原自身の鑑識眼の鋭さを物語るものであるが、長らく秘書役を務めその道に通じていた青木執事の力に負うところ大であったと思われる。

各地への旅行には常に青木執事が帯同し、これはと思う物を見つけた時には彼の意見を徴した上で買っていたとのことである。

(2)原美術館の開館とハラ・ミュージアム

原邦造の住まいのあった品川・御殿山の敷地は、明治 25(1892)年に原六郎が西郷従道から譲り受けた土地であった。

昭和 13 年に服部時計店や第一生命館を手掛けた建築家の渡辺仁が設計し、邦造の邸宅として使用していたが、敗戦後に GHQ に接収された。その後、外務省公館、フィリピンやセイロンの大使館として活用されていた時期もあったが 10 年間ほどの間廃墟となっていた。

邸宅は昭和 54(1979)年、現代美術専門館の草分けとして、邦造の孫の原俊夫の手によって原美術館に生

まれ変わった。

現代美術を通じた国際交流の推進と現在美術の活性化、アーティストの支援の場として活動をしている。
また、昭和 63(1988)年には別館として伊香保温泉近くに磯崎新の設計によりハラ ミュージウム アークが開館した。

ハラ ミュージウム アークでは 2008 年に増築した静謐な和空間の特別展示室「観海庵」で国宝・重要文化財を含む東洋古美術からなる「原六郎コレクション」を中心に紹介している。

なお、原美術館は老朽化のため、2020 年 12 月末で閉館することが決定しており、ハラミュージウムアークを「原美術館 ARC(アーク)」と改称し、今後は「原美術館 ARC」を唯一無二の拠点として、引き続き活動していくことが 2018 年 11 月に発表されている。

■参考文献

- ①原邦造「原六郎翁傳 上・中・下巻 1937 年 11 月)
- ②仲村研「同志社人物誌 原六郎」(同志社時報第 62 号 1977 年 11 月)
- ③本井康博「新島襄の師友たち—キリスト教界における交流—」(思文閣出版 2016 年 10 月)
- ④本井康博「新島襄の教え子たち(出身地別)」(図書印刷同朋舎 2019 年 8 月)
- ⑤本井康博「徳富蘇峰の師友たち—「神戸バンド」と「熊本バンド」」(教文館 2013 年 3 月)
- ⑥田中淳夫「森と近代日本を動かした男—山林王・土倉庄三郎の生涯」(洋泉社 2012 年 11 月)
- ⑦中村鈴子「家庭の模範・名流百家」(博文館 1905 年)
- ⑧志村和次郎「新島襄と下村孝太郎」(大学教育出版 2008 年 10 月)

以上